

明新会新聞

編集 第70回
一般社団法人明新会
通常総会実行委員会
写真・文 桂知之

第70回通常総会、2年ぶり開催

代議員48人参加 発展へ心新た

第70回明新会通常総会は5月22日、福井市の藤島高校敷地内にある新嶺会館プラタナスホールで開催された。代議員48人が参加（別に委任状で39人）。新型コロナウイルスの感染拡大など社会的な懸念も増す中、出席者たちは会の活動継続と発展に尽くすことへの思いを新たにされた。

前年の第69回通常総会はコロナ禍で書面決議となったため、2年ぶりの開催となった。ただ、例年通常総会に

合わせて実施する懇親会、実行委員会を担う幹事学年の平成6年卒業生による講演会を中止するなど、新型コロナウイルスの感染拡大防止に最大限配慮して実施された。会場も例年のフェニックス・プラザから



規模を縮小し、2年ぶりに開催された第70回明新会通常総会＝5月22日、いずれも福井市の新嶺会館プラタナスホール

変更した。

通常総会は、実行委員長の油谷光紀さんが開会の辞を述べ、幕を開けた。続いて藤井健夫理事長（昭和37年卒）が「絶対総会はやってみたい」と、皆さまからの言葉を頂戴した。愛校精神、愛郷精神に重ねて御礼を申し上げる」と強調。同校の松田透校長も「さらなる発展を祈念する」とあいさつした。

令和2年度事業報告など2議案を全会一致で可決し、会旗の引き継ぎ式を行って閉会した。

開催直前まで県内には県独自の緊急事態宣言が発令され、開催が最終的に決まったのは9日前。短い準備期間で無事に通常総会を終え、実行委員会総会部会長の岩佐誠さんはほっとした表情を見せるとともに「今年『輪』をテーマに準備を進めた。コロナ禍で、当たり前が当たり前でなくなっている。改めてつながれることへの感謝と、同じ時間を過ごした仲間たちとの絆を未来へつなぎたい」との思いを込めた。この状況に屈せず、伝統を守り、明新会を盛り立てたい」と誓った。

声震わせ感謝

油谷実行委員長

会旗の引き継ぎ式は、平成5～7年卒業生の「3世代」がそろって異例の形で行われた。例年は当該年の実行委員長から来年の実行委員長へ手渡すのみ。しかし、前年に平成5年卒から平成6年卒への引き継ぎができなかったため、今回は平成5年卒から平成6年卒さらに平成6年卒から平成7年卒が受け取るようになった。

平成5年卒の実行委員長近江永至さんから会旗を受け取った平成

会旗引き継ぎ「3世代」で

6年卒の油谷光紀さんは「小規模だが、対面での通常総会がなんと

か開催できたことにまずは安堵している」と、滑らかにあいさつを始めた。明新会理事、先

輩への感謝もスムーズに述べた後、突然言葉を詰まらせた。「本当にこんな大変な時期に、協力いただいた同級生の皆さんには……」。声を震わせ続けた。「本当に、もう……感謝しかないです」。ほんのわずか、ここまでの苦労をともに乗り越えた同級生たちへの思いがあふれた。

「みんなが助けてくれたことが頭をよぎって感極まってしまった」と油谷さん。同席した平成6年卒の実行委員会メンバーも「目頭が熱くなった」「ぐっときた」と照れ笑いを浮かべた。

場の和ませ

一手に

尾野事務局長



通常総会で司会を務めたのは実行委員会事務局長の尾野麻都香さん。大役を任せられ「めっちゃくちゃ緊張した」と振り返る。冒頭「開会の辞」を実行委員長に求めるところを「閉会の辞」と言い間違える場面も。ただ、それで会場から笑いが起こり「一気に場が和んだ」（実行委員会メンバー）。本人も「その後は楽になった」。緊張がほぐれると、数日前から重ねた特訓の成果を発揮。完璧に進行をこなした。

2年前から実行委員会活動に携わり、メンバー集めなどに奔走し続けた。無事通常総会を終え、ほっとしたのもつかの間。「記念誌の編集はこれから」。活動の終盤戦に向け、気を引き締め直した。

第70回 一般社団法人



声を震わせてあいさつする油谷さん(右)。ほかのメンバーも目を潤ませた



会旗の引き継ぎを終え、記念撮影する3世代の実行委員会メンバー

「ようこそ先輩」35人熱弁

リモート大幅導入 新たな試み成功

第70回明新会通常総会の記念事業の一環で、藤島高卒業生が自身の仕事の魅力などを現役生に語る課外授業「第23回ようこそ先輩」が5月21日、福井市の同校で開かれた。昨年は新型コロナウイルスの影響で通常総会とともに中止となった

め、開催は2年ぶり。新型コロナウイルスの終息が見通せない中、実行委員会はZoomを用いたリモート講義を導入するなど、ウィズコロナ時代に合わせた事業スタイルの確立に挑戦した。

同総会実行委員会執行部と担当部会が中心となり、新型コロナウイルスの感染防止策を万全にすることを前提に開催方法を模索。協議を重ねた結果、「福井県外との往来自粛」という時勢を踏まえ、県外在住の卒業生の講義をリモートで行うことを発案。

一方で「対面で行うライブ感は大事にしたい」との思いもあり、全体をリモートに切り換えず県内在住の卒業生には対面での講義を行ってもらうことにした。また、昨年講師を務める予定だった平成5年卒の先輩たちには、その無念さを晴らしてもらいたいと講師の派遣を依頼した。

当日は県内16人、県外19人の計35人が、熱弁を振るった。医師や大学教授、薬剤師、



講義を終えて記念撮影する講師の皆さん。県外の講師陣（中央）はリモートで参加した=5月21日、福井市の新嶺会館プラタナスホール

一方で「対面で行うライブ感は大事にしたい」との思いもあり、全体をリモートに切り換えず県内在住の卒業生には対面での講義を行ってもらうことにした。また、昨年講師を務める予定だった平成5年卒の先輩たちには、その無念さを晴らしてもらいたいと講師の派遣を依頼した。

「この事業は昨年残念ながら中止となり、今年もコロナ禍の中でどうなることかと思うと」をしつかりと生徒たちに伝えた。講義を終え「リモートならではのメリットもあった」と実行委員長で、講師を務めた油谷光紀さん。「海の向こうのフランス在住の同級生に講義をしていただけた」と、今までの対面形式のみの事業ではできなかったことが実現できたことと強調する。来年以降の事業実施に向けても「これが（ウィズコロナ時代の）ニュースタンダードになるかもしれない。その意味でも成果は上げられたのではないかと胸を張った。

講義終え、満足の笑み

ようこそ先輩は講義終了後、新嶺会館プラタナスホールでの「終わりの会」でフィナーレを迎えた。明新会の藤井健夫理事長に続き、担当部会の部長を務めた堂越丈志さんがあいさつし、事業を支えた全ての人たちへの謝辞を述べた。

状況だった。堂越さんは、Zoomを用いたリモート講義導入に向けての苦労をこう振り返った。リハールを2回実施して技術的に問題がないことを確認。途中で方式の変更も行うなどして無事この日に至り、ほっとした表情を浮かべた。明新会や学校への協力に感謝した上で、同級生にも一言。「なかなか顔を合わせることもできなかつたが、講師やサポートを引き受けてもらえて感謝している。同級生というつな

優しい世界、魅力前面

記念誌表紙デザイン西田さん

「自分表現できて良かった」

平成6年卒業生の「輪」をテーマとした記念誌の表紙デザインを手掛けるのは、ランドスケープデザイナー



ようこそ先輩の講義の前に花を飾り付ける西田さん=5月21日、福井市の藤島高校

でガーデンデザイナーの西田有紀さん（元3年2組）。「自分が好きなような絵しか描けないうし、自分の世界（を前面に打ち出した絵）が受け入れられるのか」との心配があったものの、同級生からは「とてもあたたかくて、優しい気持ちになる。テーマにぴったり」と大好評。西田さんは「ほめてもらってうれしく思っています」とはにかむ。

がりから始まり、貴重な時間を共有できた。実行委員会がテーマとした「輪」が体現できたことを強調した。締めくくりには記念撮影を行った。まず同ホールで講師陣で撮影後、県内講師と講義を支えたスタッフは卒業アルバム用の集合写真を意識し、藤島高校の中庭でパチリ。時を経てあどけな

さはなくなつたものの、その表情には高校時代に引けを取らないさわやかな笑みが浮かんでいた。

さはないので、ここで使わせてもらった」と言う。忙しい仕事の合間を縫って、今回は5月21日開催の「ようこそ先輩」では講師も務めた。高校被服室には、アロマディフューザーを置いてリラックスする香りを漂わせ、「朝に庭で摘んだ」という花を教壇や各テーブルに飾り付ける演出も施した。6限目で疲れている生徒への配慮とともに、空間をデザインする仕事を五感でしっかり生徒へ伝えた。

西田さんはさらに記念誌の「付録」で同級生らに贈る品物のデザインも担当。明新会の活動に「一生に一度しかない貴重な機会だと思ふ」ときっぱり。「みんなにも会えたいし、そこで自分を表現することもできて良かったです」と話した。



笑顔で記念撮影する県内在住の講師とスタッフ=藤島高校中庭

